

## アメリカ1960年代の意味

—— SDS トム・ヘイドンの回想録を中心に ——

塚 田 守

The Meanings of the Sixties in America

Mamoru TSUKADA

### はじめに

今、アメリカでは、1960年代が問われ始めている。特に、学生抗議運動に参加した60年代世代によって。彼らは、自らの運動参加の意味を、時をおいて振り返り始めている。運動参加の体験を振り返り、将来の運動への手掛かりとしようとするものたち。あるいは、運動参加による挫折感から、方向転換をはかっているものから。

この数年、1960年代に関する本が、様々な形で出版されており、それらに関する批判的文献研究<sup>1)</sup>も発表されている。本論文では、それらの1冊であるトム・ヘイドンの回想録<sup>2)</sup> (Reunion: A Memoir, 1988) を手掛かりとして、1960年代の白人学生による抗議運動の意味を考察したい。トム・ヘイドンは、学生運動の全国組織であった「民主社会のための学生」(Students for a Democratic Society, SDS) の初代の委員長であり、運動初期から、SDS 崩壊まで関わった人物であった。

ヘイドンの回想録の分析を中心とするが、トム・ヘイドン論を目指すのではなく、SDS の主要メンバーであるヘイドンの視点から再構築された運動体験の分析を通して、運動参加に共有されたであろう運動参加動機と活動を理解し、その体験が、参加者諸個人によって、現在どのように解釈されているか、を考察し、1960年代の意味を論じようとするものである。その意味において、SDS の組織としての発展史ではなく、ミルズ<sup>3)</sup>に従い、個人史と歴史との相互関係を社会の中で理解しようとするものである。

### 1. トム・ヘイドンと SDS

#### 1) SDS<sup>4)</sup>

SDS は、1960年代のニュー・レフトを代表する全国組織であり、1960年代初期から1970年代初期にかけて、当時のアメリカの体制に対し、異議を唱え、政治的抗議運動を行った北部白人学生を中心に構成されていた。SDS は、オールド・レフトを代表する「産業民主主義」(Leagues for Industrial Democracy LID) の学生教育組織である SLID から、1959年に改称されたものである。LID との結びつきは、63年まで続いており、その間、財政的援助を受けていた。

SDS は、その社会的資源と志向性、政治的立場、戦略と戦術において、LID とは対立していた。共産主義を含むどのような形態の全体主義にも、LID は批判的であるのに対して、SDS は、共産主義を容認するのでもなければ、反共的であるものでもない立場をとった。SDS の前身である SLID の役割は、単に、教育的な機関であったのに対し、SDS は、行動を起こすためのプログラムを計画する組織として発達した。また、LID が、労働組織運動に関心を持ったのに対し、SDS は、公民権運動、平和運動に関わっていた。

ニュー・レフトとして、SDS は政治的に無関心な若者たちに、抗議運動を提唱した。直接的な行動により、社会問題への関心を人々に起こさせるのが、SDS 組織の目的であった。新しいラディカリズムへの基本路線となる「ポート・ヒューロン宣言」<sup>5)</sup> (1962年6月) は、従来のアメリカ社会における支配的価値を根本的に批判することから始まり、すでに形骸化した代議制民主主義に代わって、直接民主主義の理念に立脚した「参加民主主義」を確立すべきことを強調した。更に、アメリカにおける民主過程の没落、高度産業社会における学生の存在規定、産軍複合体に集約された経済の体質、福祉体制下の構造化された大衆的無関心の造出、植民地革命、反共主義と外交問題について論述したうえで、現在必要なものは、若い知識人によって構成されたニュー・レフトであると宣言した。そして、自己の潜在能力を開発する独立心を持った人間が理想であり、相互依存に立脚した同胞性を原理とした人間関係に基づいて、「参加民主主義」体制を確立しようとしたものであった。

「参加民主主義」の確立は、全国的コミュニケーションをもった直接行動、抗議運動によってなされ、その出発点は、地方であるべきとしていた。その意味で、この宣言は、「草の根政治」を、基調にすべきであり、まず、それぞれの地域社会の政治、経済を分析し、その分析に基づいて、運動を組織することを目指した。

SDS が確立された初期の運動は、主に公民権運動及び、貧困問題を中心とした「他人救済」であり、体制内改革を目指すものであった。1964年には、フリー・スピーチ運動に代表される学園内の問題、即ち、「自己救済」の運動へ、さらに、ベトナム戦争激化に伴い、中心課題を反戦運動に変え、組織としての拡大をした。1967年から68年にかけて、SDS 全国会議内部の分裂、全国会議と地方支部間のコミュニケーションの消滅が生じ、反帝国闘争を目指す全国会議と、反戦運動だけを行う地方支部との方針のずれが生じた。そして、「ウェザーマン派」が SDS の全国会議で主流になり、過激な都市ゲリラ活動の末、地下組織になり、組織としての SDS は崩壊した、とされている。

次に、トム・ヘイドンが、どのように SDS に関わり、運動に参加していったかを回想録に従い、まとめ、ヘイドンにとっての1960年代の意味について考察する。

## 2) 1950年代に成長して：親世代との葛藤<sup>6)</sup>

ヘイドンは、親世代の持つ価値観に違和感を持ち成長した。両親は、カトリック教を信仰したアイリッシュ系アメリカ人であった。親たちの宗教と民族性は、必ずしも、ヘイドンに影響を与えるものではなかった。しかし、「アメリカの夢」を目標とし、人生をその夢を達成する手段と考えた親たちの価値観に反発を感じていた。そして、政治的傾向としては、ポピュリスト的であったが、日常的には、それぞれが知り合い同士である小さなコミュニティに大家族で住み、政治的発言は、公にしない親たちであった。しかも、人生は、自らのためでもなく、社会のためでもなく、子供のためと、信じていた。移民的特徴を排し、いま、アメリカのメインストリームに入り、中流であることに満足していた親世

代であった。

高校のときの小さな事件が、1950年代アメリカの価値に疑問を投げ掛ける契機となる。高校の卒業の悪ふざけに、学校を馬鹿にする編集随筆を書いたことが、高校側にばれ、卒業を危うくした。学校側への両親たちの説得で、卒業式には出れないが卒業証書だけは与えられた。この事件を通して、ヘイドンは、「余りにも違っていると、逸脱あるいは、非行であるとみなされる。」<sup>7)</sup>と感じた。

1950年代のアメリカ社会の一元的価値に違和感を持ちながらも、両親のアメリカの夢の為に、中西部で最も良いとされているミシガン大学に通うようになった。そのミシガン大学は、大学院を中心とするリベラルなマンモス大学であり、全国から運動家が集まっていたところであった。

### 3) 運動への道：新しい体験と新しい出会い<sup>8)</sup>

ヘイドンは、マンモス大学の持つ非人間的な授業に飽き、大学新聞で働き、教室よりも大学新聞で働いている時間の方が多くなる。大学新聞のレポーターとして働くことにより、様々な意味ある出会いがあった。SDS 設立主要メンバーで、既に SLID で活動を行っていたロバート・アラン・ヘイバー (Robert Alan Haber) との出会いにより、他の活動家にも会う機会を得た。ヘイバーは、カリスマをもった人物で、ヘイドンを引き付けた。ヘイバーは、「北部における公民権運動」を1960年の春に計画してその組織作りをしていた。

1961年2月1日の公民権運動における歴史的イベントは、レポーターであるヘイドンにとっても大きなイベントであった。4人の黒人学生たちが、ノースカロライナ州グリーンズボロの人種差別的ランチカウンターで座り込みをし、一連の座り込み運動が展開されていた。ヘイバーはその運動を支援するために、アン・アーバーのクレスジ・チェーンでピケラインを張った。それを、大学新聞に記事として書いたヘイドンは、この段階では、活動家としての意識はなく、レポーターの地位を抜け切れなかった。

大学新聞のレポーターとして、ヘイドンは、サンフランシスコ、バークレイ、ロサンゼルスなどを訪れた。ロサンゼルスで、ピケラインを張っていたマーティン・ルーサーキングにインタビューをし、「最終的には、人生での自分の態度を決めなければいけない。」<sup>9)</sup>という言葉聞き、初めて、活動家として生きる決心をした。この直接的なキング牧師との出会いは、ヘイドンをレポーターから活動家に変化させる契機となった。

ロバート・ケネディー及びジョン・ケネディーとの出会いは、ヘイドンに理想主義と社会変革の希望を信じさせるものであった。ロバート・ケネディーとは、ロサンゼルス民主党大会の会場で会った。ヘイドンは、ケネディーが、若者たちの精神は、政治過程に影響を与えるものであり、新しく目覚めつつある学生達は、正当性を持つものであると、暗に言っているような印象を受けた。ヘイドンは、また、ジョン・ケネディーが平和部隊に関する演説で、学生の理想的役割を強調したことに感動し、その後のインタビューで、ケネディーの人柄に触れ、大統領としての信頼を確信した。両ケネディーに出会い、ヘイドンは、ケネディー政権は、南部で根強く存在している人種隔離政策を撤廃出来るものと信じたのであった。キング牧師の勇気とケネディーの理想主義にふれながら、社会変革、歴史への参加のロマンを感じた。さらに、様々な集会で聞いた南部の運動に参加した学生たちの体験的な演説は、ヘイドンを南部に促すことになった。

#### 4) 運動の活動：SDS 成立とポートヒューロン宣言<sup>10)</sup>

レポーターとして南部に行ったヘイドンは、テネシー州ファエット・カ운ティー (Fayette County) で、初めて、いなかの南部 (the rural South) を体験した。人種差別撤廃に好意的である若者たちに対しては、暴力でそれを妨害しようとする白人の群衆がいた。さらに、警察を含めたコミュニティ全体が人種差別を維持しようとしていた。そこには、ブラウン裁判の人種差別違憲判決 (1954年) は、何の効力を持つものではなかった。ヘイドンは、後に、ミシシッピー州マックコム (McComb) では、モートルに滞在しているときでさえ、いつ仕掛けられるかも知れない人種主義者たちからの攻撃を恐れ、街を歩くだけで脅威を感じざるを得なかった。ヘイドンたちが、車で信号で停まっていると、群衆によって囲まれ、暴行を受けた。アトランタ空港で FBI 局員に迎えられ、その局員たちにも、また、ワシントンの法務省役人たちにも、公民権運動家たちを保護するための連邦政府の行動を要請した。しかし、連邦政府には、行動を起こす気配はなかった。その後の留置場での体験も含め南部における公民権運動の展開について、彼は、北部学生達に報告した。ヘイドンは、この体験をもって、活動家としてのアイデンティティを確立したのであった。

この南部で孤立した体験の後、南部における SNCC (学生非暴力調整委員会) のような運動のための学生全国組織が北部にも必要であると感じた。SDS の主要メンバーを中心として、59人がミシガン州北部のポートヒューロンに集まった。ヘイドンの宣言草案を議論したうえで、全国組織である SDS の宣言として採択された。この宣言は、2万部も売れ、初期 SDS の運動方針と立場を表明するものになった。1962年、ヘイドンは、全国組織としての SDS の初代委員長となり、運動の指導者として活動を展開していった。

#### 5) 公民権運動から反戦運動

ヘイドンは、公民権運動活動家として、様々な抗議運動に参加した。バーミングハム (Birmingham) での抗議運動では、キング牧師が逮捕され、焼打ち、暴動が起こった。南部の75都市で、それから2か月間に、約800のデモがあり、1万4千人が逮捕された。これを契機とし、1962年6月2日、大統領は新しい公民権運動を連邦議会に提出し、全国テレビで、この道徳的危機を乗り切るよう訴えた。しかし、そのケネディーは、暗殺され、ヘイドンは、悲劇的な意識を感じ取ったのであった。

公民権運動を展開する手段は、抗議運動だけではなかった。ヘイドンたちは、学生オーガナイザーをスラム街に送り、貧民層を組織化するプロジェクト、「経済研究と実行計画」ERAP (the Economic Research and Action Project) に参加した。ニューアーク (Newark) をターゲットとして、13名の SDS メンバーが参加した。ERAP の精神は、「自主的な貧困と質素な生活」<sup>11)</sup> とし、その目的としたことは、人々 (黒人も白人も) を、自らの恐れと嫌悪を克服し、最終的には、自らのコミュニティのオーガナイザーまたは指導者にさせることであった。このプロジェクトを推進するバックボーンになっていたのは、ジョンソン大統領の「貧困に関する戦争」政策への信頼であった。しかしながら、ヘイドンたちは、ERAP を実践していく過程で、ジョンソン政権への信頼を失うことになる。「貧困に関する戦争」の財政は、ワシントンから地方の役人の手に渡るだけで、決して、貧民層には、直接恩恵を与えていなかった。また、その基本には「家父長主義」が貫かれており、貧民層はほとんどの問題に関して、「自らを非難する」<sup>12)</sup> ようにされていたのであった。

1967年6月12日に、ニューアークで暴動が起きた。暴動は、反白人ではなく、人種主義とシステム、無関心な政治家たちに向けられたものであった。リチャード・ヒューズ (Richard Hughes) 知事は、4千人の全員白人のナショナルガードと500人の州兵を送り込んだ。10人の黒人が殺され、すくなくとも、100人は銃で負傷させられた。兵士たちは無差別な暴力行為を行っていた。ヘイドンの忠告に従い、知事が兵士を撤退させたとき、暴動は停まったものの、このような暴動は、様々な所で起きた。その間に、ジョンソン大統領は、1965年に投票権法案を通過させ、法的かつ政治的人種隔離政策に終止符を打った。この法案の通過は、比較的短い時期に達成されたものであったが、黒人たちは、南部では、まだ、2流市民であり、貧困問題は解決されていなかった。この時期は、ヘイドンにとって、今までの「希望」が「シニシズム」に変化していった時期であった。

ベトナム戦争の拡大に伴い、キング牧師は、ベトナムと人種主義を関係付ける運動方針をとり、25万人のベトナム反戦大集会を開催した。そして、運動は、「プロテストからレジスタンスへ」というスローガンのもと、改革路線は、次第に衰退していった。そして、SDS の内部にも変化が生じていた。SDS は、ベトナム反戦運動の方向に運動を展開していたが、実際は、初期 SDS メンバーが、コミュニティ活動をしている間に、60年中期の苛酷さ (bitterness) しか知らないより若い世代が、SDS をより抽象的かつイデオロギー的路線へと変化させて行った。

1968年は、暴動の年であり、転換期であった。その年、シカゴで民主党全国大会が開かれた。ヘイドンたちは、デモ活動をとおして、民主党大会に影響を与えようとした。しかし、ヘイドンたちは、「旧 SDS」(OLD SDS) とされ、「改革主義者」と批判され、ポートヒューロン宣言でキイ概念になっていた「参加民主主義」でさえ、真剣でラディカルな組織作りには、不十分であり、暴力を通してのみ革命が成立すると、された。ヘイドンは、SDS の中で、既に、指導力を発揮する地位にはなかった。

黒人指導者であり、『非暴力』を提唱していたキング牧師でさえ、ゲットー地域に広まっていたブラック・パワーの叫びの中で、1967年のクリスマスには暴力も辞さない事を述べた。1968年4月4日、メンフィス (Memphis) でのキング牧師の暗殺。暗殺後、75以上の都市で暴動が勃発した。7万人以上の兵士が、治安維持のために要請された。黒人40人が殺され、2千5百人が負傷を負い、2万8千人が逮捕され、留置された。このキング牧師の死に対応する形で、「反暴動」(anti-riot) 修正法案が、通過した。しかも、ロバート・ケネディーもまた、その年に暗殺された。

運動家として尊敬していたキング牧師と政府内の希望であったロバート・ケネディーを失い、失意の中、ヘイドンは、シカゴの民主党の全国大会でベトナム反戦を訴えるべく運動を計画した。デモをやって行く中で、ヘイドンは、2回逮捕された。民主党大会で、ジョンソン、ハンフリーが指名される可能性が強くなったとき、マッカーシーを支持者たちの多くが、悲嘆に暮れ、ラディカル化されていた。そして、ハンフリーが指名されるとわかったころ、ヒルトン・ホテルにいたマッカーシーの支持者たちがデモに巻き込まれて、警察の暴行を受けた。その中には、レポーターなどもおり、全国のテレビでその様子などが放映された。1968年を思い起こし、ヘイドンは、「1960年から1968年のこの短い時期に懸命に生きた人々ほど、高い理想で行動を起こし、大きな精神的衝撃を経験した世代は、アメリカ歴史上、めったになかったであろう。我々の世界はより良いものへと変化するものと、

一度ならず二度も信じて、結局、暴力が個人だけでなく、夢までも絶滅させると学んだだけだった。1968年以後、早い時期に我々の最良の可能性を失い、希望を求めつつ、その結末であろう苦痛を恐れながら、引き裂かれ狂わされた世代として生きることが、我々の運命になった」<sup>13)</sup>と、書いている。

ニクソン大統領当選と同時に、政治的抑圧の新しい時期が始まった。ニクソン大統領は、「法と秩序」の政策を打ち出し、ヘイドンを含む8名をシカゴ陰謀罪被告として、1969年3月に公訴した。ヘイドンは、闘争自体ではなく、派閥闘争を繰り返す運動に疲れ果て、平和なコミュニティーの生活を望んでいた。しかしながら、当時カリフォルニア州知事であったロナルド・レーガンの政治的抑圧のもと、1968年秋から1969年春まで、カリフォルニア大学バークレイキャンパスを中心とした「人々の公園」を守る闘争が繰り返されていった。ヘイドンは、抗議デモ行進には参加していたものの、この闘争中、病的な気分であった。そして、シカゴで、SDS設立当初からの友人、リチャード・フラックスが危うく殺されそうになった。このフラックス事件が、ヘイドンを憂鬱な気分にしたのは別としても、ヘイドンには、活動家たちに張り巡らされた個人的暴力の避難所はないかのように思われた。ヘイドンもフラックスも「常態」を望んでいたのであった。その時、ニクソン政権の法務省から、告訴されることになった。その1年間の法廷闘争が終わった1970年、ヘイドンは、疲れ果て、「…私達の生活は、なにか個人的かつ政治的深淵の方向へ螺旋降下しながら、私の回りの総てのものが、退廃し続けていた。」<sup>14)</sup>と感じていた。

ヘイドンは、大学の講師をしながら、自らのアイデンティティを求めて生活していたが、ニューヨーク・タイムズに出版された『ペンタゴン・ペーパー』を読み、アメリカへの信頼を回復し始め、再び、人間的生活への復帰を目指した。1972年『ペンタゴン・ペーパー』の要約版を出版して、「私は、恐れたけれど、生き延び、かつてベストを尽くしていたことに戻る、一サイクルを生きて来た。私は、硬直化した革命に自らを投じるかわりに、より人間的な自分自身に働きかけることができた。メインストリームで書き、教え、そして、地方での組織作りをして生活ができ、より成長しようとする、あるいは、男の権力闘争を避けようとするのが出来た。システムに対しての疎外された闘争に身を投じる代わりに、アメリカをより良く思えた。」<sup>15)</sup>とし、トム・ヘイドンにとって60年代に終止符を打たれた。

#### 6) 1960年代の意味

ヘイドンは、長い間、回想録を書きたいと思っていた。60年代が終わり、25年以上の時が経ち、両親が死んで初めて、回想の旅に出て様々な土地を訪ね人々と会いこの回想録を書いた。その動機を、「私は、今の私になるとは、決して、思っても見なかった。様々な挑戦、驚き、そして、多分悲劇もまだ起こるであろうと思う。しかし、私は、すでに、人生を十分生きてきた。60年代の歴史的運動であつたろう社会的、個人的挫折から80年代のこの幸運な調和にいかにか到達できたか。この時期に、何が成し遂げられ、何が失われたか。それらは、単なるノスタルジアか、それとも、新しく成長した視点にたち、60年代初期の建設的なビジョンを未来に応用することが、出来るか。」<sup>16)</sup>を考えるためであるとした。そして、「…厳しい経験によって押しこめられた60年代の理想が、我々の生きている間に、復活することを望んでいる。そして、そのことこそ、私と同じようにより広い世界を必死に、変革しようと、達成のまっ最中に苦悩を経験し、次にやって来る人々にたいし

て、より広い意識を心より望むものたちの共通した願いである、と信じている。」<sup>17)</sup>と前書きに記し、60年代世代への共感と未来への希望の礎として、この回想録を書いている。

ヘイドンは、60年代は、ほとんどの世代がなし得なかったであろう貢献をしたが、60年代世代は、まだ、人生途上であり、60年代の意味をどのように理解し、行動するかは今後の問題である、と60年代世代にたいして呼びかけている。60年代に成し遂げられたものとして次のものを上げている。<sup>18)</sup> 1) 1世紀にもおよぶ人種隔離システムの崩壊と2千万の黒人の政治的解放。2) ベトナム反戦運動のバックボーンとしての学生の役割と国民に冷戦再考を促したこと。3) 学生の批判により、大学が伝統的家父長主義を止め、大学の意志決定に学生の参加の承認する方向へ向わせたこと。4) ジョンソン大統領の1968年の出馬断念の重要な要因になり、1972年の民主党大会で「参加民主主義」を綱領に入れされたこと。5) 1970年代に、18歳投票権容認の実現。6) 女性解放運動の再現、環境保護運動の台頭、その他の様々な市民運動の直接的な媒介的役割を果たしたこと。「…このような貢献にも拘らず、60年代はまだ、苦しめる不完全さと欠点の感覚を我々に残している。もし、まだ、60年代がとらえがたいものであったら、多分、60年代は、まだ終わっていないのであろう。おそらく、まだ実現されていない巨大な変化の時代の始まりに過ぎないのかもしれない。」<sup>19)</sup> と言い、ヘイドンは、1970年代初期に味わった挫折感から脱却し、その後、「草の根」政治活動を行い、1960年代 SDS の改革路線を追及しようとしている。<sup>20)</sup> ヘイドンにとって、1960年代は、個人的には、今の政治活動の原点であり、社会的には、アメリカの変革のための大きなインパクトを与えた、と考えられたであろう。

次に、1960年代の意味の解釈をめぐって様々な立場から考察してみたい。

## 2. 1960年代の意味の解釈をめぐって

### 1) 「サイレント・マジョリティー」から

1980年以降のアメリカは、レーガン政権下、保守の時代である、と言われている。「公民権運動・シンドロム」を消し去り、アメリカは回復したとし、再び「強いアメリカ」を強調しようとする潮流がある。<sup>21)</sup> 1987年のノンフィクションの出版物としては、異常なほど注目を浴び、その書評<sup>22)</sup>だけでも1冊の本になりえたアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』<sup>23)</sup>は、60年代の意味を否定しようとする「サイレント・マジョリティー」を代表するものであろう。

ブルームは、<sup>24)</sup> 1960年代は、アメリカ人の精神に全く退廃的な影響を与えたと述べている。60年代はアメリカの文化と学問に何事も寄与しない「知的相対化」の長い歴史の産物であり、何一つといって望ましいものが生み出されなかった時代であり、知識人と大学にとって「紛れもない炎難」であった、と結論づけている。ブルームによれば、学生達は、「権威からの自由」をもたらしたと一般的に言われているが、学生のやったことは、大学教育に関する見識なしに、破壊行為をやっただけであり、アメリカの学問のもつ自由主義的伝統を放棄したのだとしている。運動に参加した学生達は、「エリート主義」と「好きなように生きたいという欲望」で行動していたに過ぎず、道徳的正義の為に運動していたというのは偽りであるし、道徳的正義は、授業をさぼるための単なる口実に過ぎないと、学生の怠情さを批判している。そして、1980年代におこった60年代を再評価しようという動き

に対しては、運動に参加した人々のある種の自己宣伝であるとし、60年代の関心の高まりをも批判している。

## 2) 運動「転向者」から視点<sup>25)</sup>

1960年代運動参加したメンバーには、60年代世代を「破壊的世代」<sup>26)</sup>と呼び、60年代は、「…好奇心を駆り立てる時代でもあり、真剣でもあった。しかし、同時に、馬鹿気ていて、破壊的であるだけでなく、無駄な時代であった。」<sup>27)</sup>と批判するものもある。

まず、60年代がアメリカ社会にもたらした基本的な破壊的行為は、人々が価値の指針としていた「システム」を揺るがしたことであった。ニュー・レフトたちの攻撃によって、権威が次々と信頼を失わせられた。その結果、様々な分裂された集団、特殊利益集団、そして、「新しく造られたマイノリティー・グループ」が生み出され、アメリカは、「罪深くかつ信頼に値しない」社会である、とされた。これこそが、1960年代の存続する遺産であり、様々な現在の社会問題の源泉である。

60年代世代は、決して、政治的に成長しようとせず、自らの社会行動の歴史的帰着を無視していた。彼らが成長しないのは、「常に、自分達は正しい」(authentic)と考えているからである。しかも、現実目に向けてのではなく、「抽象的理論」特に、「全体主義」<sup>28)</sup>的なものの考えを前提にして、総てを解釈しようとしている。

次に二人の運動「転向者」の経験に言及し、どこで、どのように、ヘイドンと関わりあい、どのように、解釈を違えて行ったかを考察する。

ピーター・コリアーとディビッド・ホロウィッツは、ヘイドンと同じように、1950年代末に、活動家と知り合い、政治意識をもち、ジョン・ケネディーの暗殺を喪失感以上のものと感じ、システムは、自らを守れないものであると悟り、運動に参加し始めた。フリー・スピーチ運動に参加し、南部で公民権運動にも参加し、クー・クラックス・クランの攻撃に会い、危険な目にもあった。

しかし、その後運動参加して行く過程で、ニュー・レフト運動の中に、常に、破壊的暴力が存在していると、解するようになった。南部で公民権運動に参加しているとき、運動の側近が、「非暴力」など信じておらず、白人との共闘も望んでいない、と感じた。

彼らは、また、1968年のシカゴの抗議運動で、ヘイドンたちの過激な闘争に対して違和感を持った。当時は、ベトナム戦争が特別な意味を持ち、「ベトナム人のため」というスローガンを掲げ、いかに、自分達が、「道徳的優越感」に溺れていたか、を反省している。ヘイドンにとっては、デモが、民主党大会に効果的な影響をあたえた、と考えられるものが、コリアーにとっては、「ニュー・レフトが、まさに、民主党を破壊した」という解釈になる。過激化してゆく運動家たちが、「過激であればあるほど、良い」というスローガンで暴力に訴えようとしているのを見ながら、彼らは、「黙示録」(革命)が来るのを待っていた。ヘイドンが、「パークレイ・解放プログラム」を組織し、ブラック・パンサーを「国民解放戦線」に見なしたり、「もうすぐ、内戦が始まる」と言っていたことなど、過激化して行く運動を傍観していた。また、初期 SDS の改革路線の延長上で様々な運動に参加して行ったニュー・レフトたちに対して、「黙示録のために集まっていた人々は、環境保護運動、消費者運動、政治に去って行った。あるいは、大学院に戻って学位を取ろうとしていた。」<sup>29)</sup>と批判的である。そして、革命の前衛であるはずのブラック・パンサーが、街のギャングでしかなかったことを悟り、また、彼らが働いていた『ランパー



ツ』の帳簿係りが、殺されたことで、運動を続けることに疲れてしまった。

その後、『ランパーツ』の特集として、ニュー・レフトや社会問題の取材を重ね、自分達の過去を深く再評価し、自分達が過去にやったことについて、遙かに公平な立場になりえた、という。そして、1985年、レーガンこそが、アメリカの民主主義がいかに、もろいものであるか、そして、どの程度守らなければいけないかを知っている大統領であると思い、「レーガンのためのレフトたち」という記事を『ワシントンポスト・マガジン』に載せ、「初めて、アメリカ人のように感じた」<sup>30)</sup>と回顧している。そして、現在の彼らの役割は、「破壊的な1960年代」を見張ることであると、結論づけている。

### 3) 初期 SDS メンバーから

ポートヒューロン宣言に基づき全国組織 SDS を設立した初期メンバーたちは、1964年までの公民権運動中心にした改革路線の活動が、SDS 本来の運動であり、その後の「革命」指向が、SDS を崩壊させた、としている。ヘイドンの次の SDS 委員長であるトッド・ギトリン<sup>31)</sup>は、ヘイドンと同じように、1950年代ジェイムズ・ディーンの『理由なき反抗』という世代アイデンティティ、疎外感、そして、使命感が、運動参加の動機だと振り返っている。豊かさの否定という「若者の殉教」の意識が、1960年代文化の根底にあった。そして、その文化的離反と政治的反乱が1960年代の初期 SDS の根底にあり、公民権運動への参加が「英雄的個人的コミットメント」の一つの基準となり、運動を展開していった。

ギトリンは、1965年になって初めて、公民権運動の様々な勝利がもたらされたものの、1964年秋には、SDS は既に衰退し始め、ベトナム戦争の激化に伴う反戦運動の結果、崩壊することになった、と言う。初期 SDS メンバーたちが、後の学生大衆運動への原動力となったが、その運動の発展が運動の崩壊に向かわせた、という「不可避なジレンマ」こそが、60年代世代の悲劇であったとした。そして、1968年のシカゴの闘争は、運動の戦略的行動というよりはむしろ、「自らをためす」為であり、根底には、ジェイムズ・ディーン精神があった。そして、ギトリンは、後期 SDS の指導者たちの派閥争いとニヒリズムにたいして、批判的であった。

リチャード・フラックスは<sup>32)</sup>最近出版された、かつての運動参加者によって書かれた本を評し、ニュー・レフトは、1970年代初期に「死滅」し、その死滅は、その自己破壊的傾向によるという前提で論じ、「警告的な物語り」を、現在の若者達に伝えているという点で、批判されるべきである、とする。ただ、自己批判的な今の幻滅意識だけに影響されずに、真に、60年代を理解しようとしたら、60年代の「崩壊と継続」両面について語るべきであり、今も、本来の「ニュー・レフトのプロジェクト」は継続されていると主張している。

その本来のプロジェクトは、1960年代の組織化の仕方、短い期間で成し遂げられるものではないとし、60年代の運動のもっていた1)「革命主義」、2)組織としての SDS、3)若者の反逆は、本来のプロジェクト実現には、不十分であり、今後新しい方向づけをすべきである、と論じている。<sup>33)</sup>

1970年代初期から行われている様々な地方に根差した運動は、本来のニュー・レフトのプロジェクトを実現しようとする試みである。かつて運動に参加したものたちが、「集団実験」や、地方政治で活動している。これらは、ニュー・レフトの貧弱な残存物と解されるべきでなく、実行可能な政治と生活の間の個人的統合を作り出す為に、また、ニュー・

レフトのプロジェクトを制度化しようとするため、そして、現実の世界でラディカルな民主主義の原理を実践しようとするために新しい分野で実行しようとするものである。

初期 SDS たちは、ヘイドンと同じように、ポートヒューロン宣言に明記された「参加民主主義」の草の根政治活動を継続しており、政治的に、そして、短期的には、挫折したかのようだが、本来のプロジェクトの進行過程にあるとし、1960年代の運動に肯定的意味を与えている。

### 3. 結 語

ヘイドンの回想録を中心に考察し、1960年代の意味を考えるのが、この論文の目的であった。ヘイドンは、初期 SDS を代表し、基本的には改革路線の運動を展開しようとした。しかし、ベトナム戦争の激化という歴史的事件に巻き込まれる形で、「革命路線」を推進するまではいかずとも、戦略として暴力的闘争に入ってしまった。そして、物理的暴力と精神的暴力に拘わる過程で、アイデンティティ危機に陥り、疲れ果てた。その政治的闘争に疲れを癒してくれたのは、平凡な家族であり、子供であった。そのとき初めて、幸福を味わうことになる。同じことが、1960年代の意味の解釈を異にするコリアー、ホロウィッツにも言えることであった。人々は、政治闘争だけでは、内面世界が満足し得なかった、ということを表している60年代世代の共通した「挫折感」からの「回復」へのパターンであるようである。

1960年代世代のそれぞれの個人史を読んでいくと、彼らは、1950年代後期、1960年代初期という時代が生んだ世代であり、理念としてのアメリカ民主主義に奉仕する世代であった、と言えるのではないだろうか。勿論、家族背景が重要な役割を果たしたかも知れないが、初期 SDS メンバーに関しては、大学に行ける程の中流階級以上であったことは、間違いないが、そのことだけでは、60年代の運動参加過程を説明するのには不十分であろう。アメリカの1950年代の「不寛容さ」と公民権運動のもつ衝撃を直接に感じ得た道徳的使命感、政治意識がもしなければ、そして、両ケネディーの「理想主義」がなければ、運動に参加していなかったのではないだろうか。

60年代の意味を問うとき、60年代を否定的に評価するものは、60年代の破壊的暴力とアメリカの価値の相対化の弊害を強調し、現在起こっている害悪の源泉は、根本的価値がゆらがされた結果であるとする。さらに、1980年代の保守化は、1960年代によってもたらされたものである、とする。<sup>34)</sup>

それに対して、60年代を肯定的に評価するものは、その運動の継続としての元活動家のコミュニティに根差した様々な運動は、60年代の経験を生かした、成長した活動であり、真にアメリカの民主主義を追及するものであるとし、「草の根」運動によって、アメリカ社会を根本的に変革し、より質を求める豊かで、解放された生活を創造しようとしていると、する<sup>35)</sup>。また、価値の相対化は、学問分野に新しいテーマを与え、<sup>36)</sup> その相対化は、「アメリカン・マインドの終焉」をもたらすものではなく、相対化に基づいた真理追及のための「永遠の討論」<sup>37)</sup>こそ、アメリカ社会を発展に導くものである、と論じた。

以上のように、それぞれの立場とも、1960年代は、アメリカの価値の相対化をもたらし、という点では一致している。その相対化が、果して現代アメリカ社会にとって弊害で

あったのか、進歩であったのか、が根本的な問題であろう。相対化は、今まで権威としてあったもの、伝統としてあったもの、を否定し、何が正しいかを示す指針を喪失させるであろう。その結果、人々は、目的を見失い、社会不安に陥るかもしれない。しかし、それは、今まであった価値が、急速に変動するアメリカ社会に適合しなくなってしまった結果ではないであろうか。その状況では、ブルームがいう古典から学ぶ「真理の追及」だけでは、十分とは言えず、ヘイドンの言うように、現実社会での行動から学ぶと同時に、真理を求めての「永遠の討論」に基づいた社会を指向すべきではないであろうか。勿論、1960年代の運動の過激化の結果としての性急な革命思想と暴力は、アメリカ社会には、受け入れられないということは、60年代世代が、挫折感をもって、味わったものである。その経験を生かし、日常生活を放棄しない今置かれている状況の変革を目ざした「草の根」運動は、長期的には、アメリカ民主主義の理想の実現を可能にするのではないであろうか。1960年代は、運動参加者には、より実現可能な社会変革の運動指針を学んだ時期であったであろうし、直接運動に関与しなかった人々にとって、価値の多様化とアメリカ社会の不公平の存在を知る機会であったという意味で、現代のアメリカ社会に大いに影響した時代であった、と言えるのではないであろうか。

現代のアメリカ人は選択を迫られ、マジョリティーが、平穏無事な私的な世界を望み、価値の多様化の現実を目を閉じ、弱者を切り捨てることにより、自らの生活を守るという選択をしているようだ。しかし、一旦、不公平に気付いた人々は、それへの不満を、制度内政治で表現し、1988年には、黒人のジェシー・ジャクソンを民主党第二の大統領候補に仕立てあげたように思える。今や、1960年代のニュー・レフトが、現代のアメリカ社会に制度化されつつあるのかもしれない。

#### 注

- 1) Philip Altbach, "Students and the Conflicts of the Sixties," *Comparative Education Review* Vol. 33: 377-380, 1988. Ron Eyerman, "Social Movements: Between History and Sociology," *Theory and Society* Vol. 18: 531-545, 1989. Maurice Isserman, "The Not-So-Dark and Bloody Ground: New Works on the 1960s," *American Historical Review* Vol. 94: 990-1010, 1989. Tim Wohlforth, "The Sixties in America," *New Left Review* Vol. 178: 105-125, 1989. Breines Wini, "The Sixties Again," *Theory and Society* Vol. 14: 511-523, 1985.
- 2) Tom Hayden, *Reunion: A Memoir* (New York: Random House, 1988).
- 3) C. Wright Mills, *Sociological Imagination* (New York: Growve Press Inc., 1959). トム・ヘイドン自身ミルズのフレームワークで、回想録を書いている。
- 4) 拙論「1960年代アメリカにおける学生抗議運動」広島大学修士論文により、SDSの運動発展史をまとめた。
- 5) *Socialist Review*, Special Issue, "Port Huron: Agenda for a Generation," Vol. 79, 1985.
- 6) Hayden, op. cit., pp. 1-21.
- 7) Ibid., p. 21.
- 8) Ibid., pp. 25-52.
- 9) Ibid., p. 35.
- 10) Ibid., pp. 53-102.

- 11) Ibid., p. 128.
- 12) Ibid., p. 145.
- 13) Ibid., p. 326.
- 14) Ibid., p. 415.
- 15) Ibid., p. 439.
- 16) Ibid., p. xvi.
- 17) Ibid., p. xix.
- 18) Ibid., p. 501.
- 19) Ibid., p. 506.
- 20) トム・ヘイドン『アメリカに未来はあるかⅠⅡ』現代アメリカ研究集団訳，新評論，1982.
- 21) Hayden, op. cit., p. 506.
- 22) Robert L. Stone ed. *Essays on the Closing of American Mind* (Chicago: Chicago Review Press, 1989).
- 23) Allan Bloom *The Closing of the American Mind* (New York: Simon & Schuster Inc., 1987).
- 24) Ibid., pp. 313–335.
- 25) 1960年代の運動に参加者たちの回想録を編集した本，John Bunzel H. ed *Political Passages* (New York: Free Press, 1988) は，執筆者すべてが，60年代世代に対して批判的であるわけではないが，「転向者」の意見を代表しているものであろう。
- 26) Peter Collier and David Horowitz *Destructive Generation: Second Thoughts about the Sixties* (New York: Summit Books, 1989).
- 27) Bunzel, op. cit., p. 185.
- 28) David Horowitz, “Letter to a Political Friend,” Bunzel ed. op. cit.
- 29) Bunzel, op. cit., p. 177.
- 30) Collier and Horowitz op. cit., p. 278.
- 31) Isserman, op. cit., pp. 995–997.
- 32) Richard Flacks, “What Happened to the New Left,” *Socialist Review* Vol. 19 (Jan–March), p. 94
- 33) Ibid., p. 108.
- 34) Altbach, op. cit., p. 379.
- 35) Hayden, op. cit., pp. 503–504; James Fendrick M, “Activists Ten Years Later: A Test of Generational Unit Continuity,” *The Journal of Social Issues* Vol. 30. p. 108, 1974; Michael Walzer, “The Pastoral Retreat of the New Left,” *Dissent* (fall), 1979.
- 36) Charles Lemert, “Future of the Sixties Generation and Social Theory,” *Theory and Society* 17: 789–807.
- 37) Tom Hayden, “Our Finest Momet,” in Stone ed. op. cit., pp. 347.